

聖書:第一列王記12章16～33節

説教:ダビデの家に背いた

はじめに

ソロモンが亡くなり、息子のレハブアムが跡を継ごうとしたとき、イスラエルの長老たちから一つの条件がつけられました。ソロモンはイスラエルの歴史の中で最も繁栄した時代を築き上げましたが、それを支えるために国民は多額の税金を納めなければなりません。また、働き盛りの男たちが公共工事のために強制労働に駆り出され、その留守を守るために年寄りや子どもたちが大変な苦労を強いられました。こんなことがいつまでも続いてはいけません。次の王となる者は、国民の負担を軽くしてほしい。もしそうしてくれるならあなたに従う。そのような条件でした。

しかしレハブアムは、そのようなことを言うならもっと税を重くすると脅かして長老たちの申し出を足蹴にしてしまいます。その結果起きたことが今日のところに書かれています。ダビデが苦勞して一つの国としてまとめ上げたイスラエルが、一夜にして北と南に分裂し、互いにいがみ合うようになってしまいます。いったいなぜこんなことになってしまうのか。このことは私たちに何を教えようとしているのか。ともに見てまいります。

1 ふたりの王

1) 南王国 (ユダ) : レハブアム

まず今日登場する二人の人物について最初に整理しておきます。一人はソロモンの子でレハブアムという人。二つに分裂したうちの南王国、ユダ王国とも言いますが、その王さまです。彼は今言ったように、北の長老たちの願いを拒みしました。

2) 北王国 (イスラエル) : ヤロブアム

もうひとりにはヤロブアムです。彼はソロモンの忠実な部下のひとりでしたが、ソロモンが国民を苦しめる一方で自分は豪勢な暮らしをしているそのやり方に腹を据えかねてクーデターを起こすのですが失敗してしまい、エジプトに逃亡していた人でした。ソロモンが亡くなったのを機会に呼び戻され、レハブアムとの交渉が決裂したとき、北王国、ここでは全イスラエルとかイスラエルと言っていますが、その王になっていきます。

2 レハブアム (南王国)

1) ダビデの時からうらみ

話を、全イスラエルの長老たちとレハブアムとの交渉が決裂したときに戻します。そのとき、全イスラエルが言ったことばはこうでした。16節。「ダビデのうちには、われわれのためのどんな割り当て地があるか。エッサイの子のうちには、われわれのためのゆずりの地はない。イスラエルよ、自分たちの天幕に帰れ。ダビデよ、今、あなたの家を見よ。」

このことばはここで初めて出て来たのではない。さかのぼることダビデの時代に、シェバというよこしまな男が叫んだことばそのままです。あれから何十年も経っているのに、なぜ同じフレーズがここに出て来るのか。

それはイスラエルの歴史と関係しています。ヨシュアの時代のことですが、エジプトから逃れた民たちが荒野を四十年間旅してカナンへの地に入ろうとしているとき、ヨシュアは全体を十二部族に分け、部族ごとに住むべき場所を割り当てた。それが始まりでした。

そうすると何が起ころか。例をひとつ挙げます。これは実際にあった話ですが、ある大きな会社ではどこの藩の者をえこひいきして昇進させたと言文句が出て騒ぎになったと聞きました。江戸時代の話だと思ったらいまでも尾を引いている。聞いて驚きました。

実はイスラエルでも同じです。ダビデを輩出したユダ族は日の当たるところ、それ以外は日陰もの。ユダ族ばかりが名誉を独占し、他の部族には何も良いことはない。ダビデの時代からそんないがみ合いがあった。普段は表に出てこないのですが、このような危機的なときにまた表に噴出してきただけです。

2) 北と南の兄弟が対立する

レハブアムは役務長官アドラムを北に派遣して、従う意志があるかどうかを確認させるのですが、殺されてしまいます。もうこれは、北が南に対して宣戦布告したのと同じ。メンツを潰されたレハブアムは、当然のように軍隊の出動を命じます。ところがそのとき、主の声がありました。24節。「主はこう言われる。上って行ってはならない。あなたがたの兄弟であるイスラエルの民と戦ってはならない。それぞれ自分の家に帰れ。わたしが、こうなるように仕向けたのだから。」

前回、レハブアムが長老たちの願いを聞き入れなかったのは、主がそう仕向けたからだという所を見ました。問題が大きくなって罪がはっきりと自覚できるように、そのような目的のためにあえて神は手を出さない。そのように言いました。

3) 主はなぜ介入するのか

でもここでは主は口出しして事態に介入するのです。なぜそうするのでしょう。イスラエルに対して、あなたがたの先祖と一緒にエジプトから逃れて荒野を四十年間旅し、カナンの地に導き入れられた。そのようにして救われた兄弟ではないか。その兄弟が互いにいがみ合い殺し合うようなことがあってはならない。神は、そのように言いたかったのでしょうか。確かに、神がストップをかけたことで悲惨な戦争は避けられたので、神の目的は達成されたかに見えます。レハブアムをはじめ、神に尋ね求めようとする者がいない時代だったのに、なぜかこのときだけは人々は素直に主のことばに従います。それはよいとしても、では、このことに感謝した人たちはいたのか。戦争にならずによかったと喜んだのか。自分たちはどこで間違ったのかと冷静になって考え、悔い改める者が起こされたのか。いいえ、だれもいない。

そうしますと、主がここで介入された理由は何か。隠れていた罪をはっきりと表に出させるためにそうされたと見るべきでしょう。その実例が、次に出て来るヤロブアムに見ることができます。

3 ヤロブアム (北王国)

1) 金の子牛

26, 27節。「ヤロブアムは心に思った。『今のままなら、この王国はダビデの家に帰るだろう。この民が、エルサレムにある主の宮でいけにえを献げるために上ることになっているなら、この民の心は彼らの主君、ユダの王レハブアムに再び帰り、彼らは私を殺して、ユダの王レハブアムのもとに帰るだろう。』」

彼は、金の子牛を造ることからはじまって、エルサレム神殿に代わる宮を造り、本来はレビ族だけしかできなかった祭司の職を一般の民の中から任命し、祭りの日まで勝手に決めてしまう。こうすれば、敵対する南王国にあるエルサレム神殿に行く必要がありません。全部自分の国の中で済ますことができます。

2) 真理をすり替える

なぜそこまでするのか。国民のことを思ってそうしたのではない。自分の身の安全を守るためです。レハブアムに平然と刃向かった民たちです。少しでも不満があれば、今度は自分がいつか切り捨てられる。そのような恐怖があります。国民の気に入るようなことをしなければならぬ。それでこうした。でも、それは正しいことだったのか。

出エジプト記には、民たちが金の子牛を造ってお祭り騒ぎをし、罪を犯したことが詳しく書かれています(出エジ32章)。ヤロブアムがそのことを知らないはずはない。それなのにこう言っています。「もうエルサレムに上る必要はない。イスラエルよ。ここに、あなたをエジプトから連れ上った、あなたの神々がおられる。」

これは明らかに嘘です。今ならフェイクと言うのでしょうか。嘘でも大きな声でなんども語れば真理であるかのように受けとめられていく。まさかこんな時代が来るとはだれも予想もしていなかった。いまそれでみな戸惑っています。ところが聖書を見ると、これと同じことをすでにやった人間がいた。人間のすることはどんな時代であろうと変わらないのです。

ヤロブアムは自分の利益を守るために真理を嘘ですり替えることを平気でする。その結果どうなるか。エルサレムに行く必要がなくなるのですから、人々は喜んだかも知れない。でもこの後どうなったか。真理を捨て、偽りの神々を拝んだ北王国イスラエルはやがて滅んでいくことになります。

4 神

1) 人の罪を明らかにする

神は何を考えておられるのでしょうか。神がイスラエルに対してとられた態度についてもう一度振り返ります。レハブアムが心を頑なにして長老たちの願いをはねつけたとき、神はあえて手を出さず、そのままにされました。でも、緊張が高まって戦争になりかけたとき、今度は神は介入されて戦争を押しとどめた。その結果何が起きたか。ヤロブアムの心の内にあることが明らかになりました。真理を嘘ですり替える。それを平然と、どうどうと国の一大事業として推進していく。知らなかったのではないのです。エジプト脱出のときに偶像礼拝がどれほどひどい罪であるのか、神から徹底的に教えられてきたはずです。もしあのとき、モーセが神の前でとりなしをしなかったならイスラエルは滅ぼされていたことも知っている。にもかかわらず、同じことを繰り返す。これを見て、ひどいと思わない人はいないでしょう。でもこれが人間の罪なのです。どれほど人というものは罪深いかを私たちに

自覚させるために、あえて神は仕向けておられると考えられます。

なぜこうまでして私たちは罪を自覚する必要があるのでしょうか。神が愛の方であるというのなら、もっとやさしくしてくださるべきではないのか。それは虫の良い願いということでしょう。日本語には「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ということわざがあります。何度繰り返しても、私たちはすぐに忘れてしまうのです。罪はたいしたことないのだと考えてしまう。そうして救いを求めなくなります。それが人間なのです。ですから神は、私たちが心底罪を自覚するようにと仕向けます。国を失う惨めさを経験してやっと自分がどんな罪を犯してきたのか自覚する。そのとき初めて人は神に救いを求めていきます。

2) 人を救う (ヨハネの福音書4章)

いったい神はどのようにして救うのでしょうか。この北王国に神はどのように関わるのか。

イエスがあるとき、サマリヤに行かれたときのことがヨハネの福音書4章に書かれています。井戸に水を汲みに来たあるひとりの女性がイエスにこう尋ねました。「私たちの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」「この山」とは、ヤロブアムが設けた礼拝所のことを指していると考えられます。ヤロブアムの時代からおよそ千年経ってはいるのに、まだ北と南のしこりが残っていて、サマリヤの人たちは自分たちの宮で礼拝をしていた。それがこの場面の背景です。

女性の問いかけに対しイエスはこう答えます。「女の人よ、わたしを信じなさい。この山でもなく、エルサレムでもないところで、あなたがたが父を礼拝する時が来ます。」

井戸の傍らに来た罪深い女性は、ヤロブアムの子孫といってもいいでしょう。ヤロブアムは真理をすり替えひどい罪を犯していきました。それでも神は救おうとされます。暑い日差しのなか、弱り切った姿となられてイエスは、ひとりの罪深い女性のかたわらに来られ、罪に苦しむひとりの女性を救っていく。これが私たちの神なのです。

人々はダビデの家に背き、神を捨てて、自分たちの作った神々を拝みます。でも神は私たちを捨てません。どれほどに神は私たちを愛し、忍耐されているのか。そのことを覚えて感謝したいと思います。